

中学校 第2学年 国語科書写 学習指導案

埼玉県さいたま市立内谷中学校
教諭 宮澤 蔵人

単元名

二 行書と仮名を調和させて書いてみよう
4 書く速さを意識して書く——行書と仮名の調和——（1時間）

単元のねらい

行書と行書に調和する仮名の書き方を理解して、書く速さを意識することができる。

本時のねらい

行書の学習を生かして、書く速さを意識することができる。

指導時期

9～11月

「指導者用デジタル教材」活用の意図・目的

私は、これまでの書写の授業において、生徒に対して「実践を見せること」に課題意識があった。特に、硬筆の授業では、実物投影機を用いて手もとを映したり、黒板を机に見立てて実演を行ったりと、さまざまにだてて講じてきた。しかし、教室全体に対しての見せにくさや、再現性の難しさなどの問題があり、硬筆の指導に対して、少なからず苦手意識をもっていた。

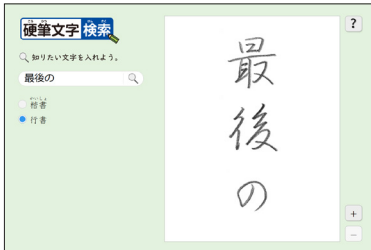
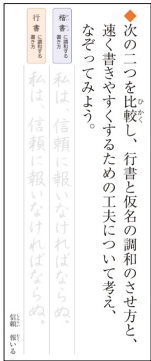
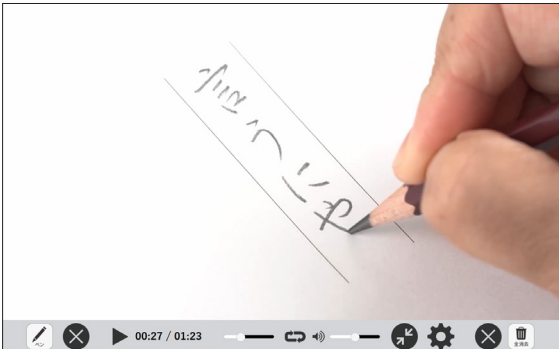
紙の教科書を用いた授業は、どうしても単調になりやすく、「①目標の提示→②ポイントの全体指導（単元によっては実践）→③生徒による実践→④机間指導／個人指導」のサイクルに陥りやすい。このような指導に決して問題があるわけではないのだが、授業の構造が単調になってしまうと、生徒の意欲は向上しにくい。意欲を高めることや課題意識をもたせることは、書写の指導において最も重要な課題である。

一方、「指導者用デジタル教材」では、そのような課題を一度に解決できると考えた。書写の指導に自信のない教師にとっても、また授業の単調化防止のためにも、非常に役立つコンテンツやツールが豊富に用意されている。生徒の視点に立って考えた際にも、「指導者用デジタル教材」を用いた書写の授業は、新鮮であり、より自分の課題と向き合えるようになるのではなかろうか。

このような考えのもと、本単元では、硬筆で学習する「行書」に興味をもたせ、生徒自身が意欲的に活動できるように、「指導者用デジタル教材」を授業に取り入れることとした。

本時（第1時）の展開

	活動内容	デジタル教科書・教材の活用
導入	●「指導者用デジタル教材」の初期画面を開いてコンテンツを起動する。 ●p.80を大型提示装置に投影し、『走れメロス』の一部を音読する。	

	活動内容	デジタル教科書・教材の活用
導入	● 本時の目標を知る。 目標 行書と仮名のバランスを考えながら、丁寧に速く書くための工夫を考えよう。	● 目標を提示する。
展開	● 『走れメロス』を1分間で試書する。 ● p.80「考えよう①②」について考える。 T：試書の中で、行書の特徴が表れている部分がありますか。 C：筆脈、始筆・終筆、点画の連続・変化・省略、曲線的。 T：丁寧にバランスよく、速く書くために大切なことは何でしょうか。 C：点画を省略させる。連続させる。 → 楷書と行書とを比較し、生徒自身に速く書くための工夫を考えさせたい。 ● これまでの行書学習を想起させる。 ・ 仮名は漢字より小さめに書く。 ・ 筆脈、点画の連続・変化・省略を意識する。 ● p.81の「生かそう」の楷書と行書とをなぞり書きし、比較する。 ● 速く書きやすくするための工夫について確認し、意識して練習する。	● タイマーを用いて、1分間でできるかぎり多くの文字を書くように促す。  ● 「硬筆文字検索」を用いて、言葉を区切って確認することも効果的である。  ペン機能を用いて、行書の特徴を示せるとなおよい。 ● 比較する二文を大型提示装置に投影する。  ● p.80の運筆動画を視聴し、運筆を確認する。  生徒が書いている間は、運筆動画を繰り返し流しておく。

	活動内容	デジタル教科書・教材の活用
まとめ	● 1分間でまとめ書きをする。 ● 試書とまとめ書きとを比較し、自己評価をする。 評価 行書と仮名のバランスを考えて、書く速さを意識している。(思・判・表)(硬筆カード、工夫について考えた内容)	● 各自の端末のカメラ機能を使用し、試書とまとめ書きとを撮影する。 「比較ツール」を使用して、試書とまとめ書きとを比較してもよい。

「指導者用デジタル教材」を活用したことで得られた効果

① 教室全体への目標や課題の提示

教師の メリット

目標や課題の提示を瞬時に行うことができる。準備が容易で、働き方の改善にもつながる。

生徒の メリット

教師が板書する間の待ち時間がなくなる。

② 「硬筆文字検索」の活用

教師の メリット

楷書と行書との違いを明確に示すことができる。拡大機能があるため、細部まで見せることも可能。

生徒の メリット

課題となる文字を自分で検索することで、主体的に学習を進められる。生徒が個別に目標を設定し、取り組める。

③ 運筆動画の視聴

教師の メリット

教師による技能差に関わらず、全クラスで統一された授業が可能になる。これまでの指導では伝えづらかった筆圧の強弱やリズムなどの指導が行いやすくなるため、これまで以上に授業の幅が広がると考えられる。

生徒の メリット

これまで以上に直感的な理解をしたうえで、書くことができるようになる。「まなびリンク」や「学習者用デジタル教材」を活用するなど、生徒が各自で視聴できる環境であれば、机間指導を待つ必要がなく、習熟度に応じた学習を進めることができるだろう。

④ 「比較ツール」の活用

教師の メリット

生徒の取り組み状況や、工夫の仕方などを評価しやすい。画像データのやり取りのため、紙媒体での提出物管理が不要である。

生徒の メリット

自己評価を行いやすい。振り返りも簡単に行うことができるため、次の学習にもつなげやすい。自分の技量を図ることができるため、意欲の向上にもつながる。

デジタルコンテンツを使用する際のコツや留意点

- 動画視聴の際には、ただ視聴するだけに留まらないよう、課題意識をもたせたいうえで視聴させたい。
- 鉛筆や筆だけでなく ICT 機器を用いた学習を通じて、手で書くことの楽しさを実感させたい。
- デジタルコンテンツと紙の教科書とを併用し、場面に応じて、デジタルコンテンツで得た必要な情報を、紙の教科書に書き込ませるなどの工夫も必要。